

## 豊かな死を望める地域医療連携の「尾道方式」 公益社団法人移行記念セミナー（広島会場）から

（公社）日本医業経営コンサルタント協会は11月8日、広島で公益社団法人移行記念セミナーを開催した。

講演は「少子高齢社会に対応した社会保障制度にむけて」（講師：国立保健医療科学院 医療・福祉サービス研究部 上席主任研究官 深田聡氏）と「超高齢社会に向けての地域医療連携と在宅医療～病院、開業医、介護事業のコラボレーション～」(講師：尾道市医師会地域医療システム研究所 所長・岡山大学医学部大学院 臨床教授・片山医院 院長 片山壽氏)の2題。このうち「超高齢社会に向けての地域医療連携と在宅医療」のポイントを紹介する。

尾道市医師会方式ケアカンファレンスは「尾道方式」として全国に知られている。尾道市医師会がリーダーシップを取り、在宅主治医と開業医チームで総合的、長期的に患者本位の支援をしている。脳卒中のような障害が残る病気や末期がんの患者を、病院から「返す」のではなく「帰す」視点で取り組むもの。退院前に勤務医・在宅主治医が中心となって役割分担をし、地域全体で支え合うために、地域の医療・介護・福祉資源をすべて活用した地域医療連携を実践しているとした。

尾道市医師会方式ケアカンファレンスは、医療・介護・福祉のスタッフが、患者家族も交えて情報交換を行い、患者の情報を共有する。一人暮らしの高

齢者も多く、民生委員にケアカンファレンスに入ってもらうこともある。ケアカンファレンスは仕事の合間の15分間。場所は病院・診療所とさまざまだが、業務の合間に集合する。在宅主治医を中心に皮膚科、歯科、薬剤師、看護師、ケアマネ等、患者の状態に応じてチームを組んで、医療・介護・福祉サービスの方針を決めると説明した。

患者・家族には、退院してもこのチームが支えてくれるという安心感が生まれる。この安心感が「家に帰った」につながり、家族と一緒に暮らし、ケアをしてくれ、自分の願い「豊かな死」（高いレベルの死）がかなえられる。在宅から病院へ紹介した患者を、在宅主治医が応診の途中に立ち寄り、診察することも日常的な光景だと語った。

連携型医療モデルとして、多くの課題も解決している。たとえば勤務医の減少で疲弊した病院の当直を、開業医が当番で支えている。日頃から連携しているため、顔見知りで気心も知れたスタッフとスムーズな対応ができています。尾道の状況に合った方式として「尾道方式」と呼ばれ、その後、該当地域にあった〇〇方式が次々と生まれている。

医業経営コンサルタントには、それぞれ地域の医療福祉資源を活かした医療連携システム構築の支援を期待したいと片山氏はまとめた。

（本部広報委員 藤井 康彦）

